

随 想

白夜の弦月
—スウェーデン福祉視察旅行—

永田 量子

この6月にスウェーデンを訪れました。ストックホルムを中心とした高齢者障害者福祉視察がその目的です。参加者は、障害者、91歳の超高齢者、ヘルパー、ボランティア、福祉の現場で働く人、保健婦、看護婦など17名でした。私にとって初めての海外旅行が、東京や京都に行くより気遣いなくでき意外でした。お世話下さった方々と、平和の国スウェーデンのおかげでしょう。

ナーシングホーム、サービスハウス、アルコール中毒患者や痴呆老人のグループホーム、補助器具センター、障害児リハビリセンター、デイセンター、在宅ケアの実態視察、社会保健庁、生協訪問、夜間パトロールの同伴などで、10日間はまたたく間に過ぎました。“どんな人にもノーマルな生活環境を”と平等とノーマライゼーションの思想がどこからも伝わってくる視察でした。今回は福祉のすばらしさのほかに、私の感じたささやかな思いを記してみました。

絵はがきの中の世界

ストックホルム到着翌日、朝5時からホテルの周りを散歩しました。この一帯はかつて王家の狩猟地だったとのこと。湖に浮かぶ白鳥、ライラックの花、古い建物、のびやかな木々、朝日の中の野花たちと、まるで絵はがきの中を歩いているようでした。野兎、鹿も顔を見せてくれ、彼らの慈愛を含んだ目と見交わすこともできました。180年間戦争をしていない恩恵は、人や建物だけでなく、動物の目にまで表れるのでしょうか。バレエ白鳥の湖観賞後オペラ座からみた白夜の弦月も不思議な美しさでした。

環境にやさしい国

日本でも近年環境問題は多くの関心を集めていますが、スウェーデンでは、私がお土産を買った百貨店では包み紙を用いませんでした。ここ1、2年で、ビニール袋、トレーなどの石油製品の廃止をすすめていますし、子供の紙おむつも布のものにかえていくなど、このようにきれいな環境の国でも汚染源を絶

つ努力をしています。子供たちの将来を考えているのでしょう。缶の回収も造った者が自分たちで処理するというきまりです。例えば110円のうち10円が缶の回収者の収入になるので、小学生たちが「空き缶・空き瓶はないかしら」と各家を回るそうです。確かに投げ捨てる空き缶や紙屑を全く見ませんでした。愛玩動物の虐待も法で禁止されていて、犬や猫などペットを捨てる人はなく、従って野良猫、野良犬もいないそうです。どうりで公園の芝生の上で安心して日光浴ができるわけですね。ちなみに日本でも犬猫を捨てたら3万円の罰金ですが、知っている人がどの位いるのでしょうか。

スウェーデンの人々

旅行中にお会いしたすべての方が親切で歓迎的でした。言葉を交わさなくても細やかな心づかいが感じられました。徘徊の老人を小学生が案内すると本で読んだことがあります。幼少時から本当の優しさを分かち合う大切さを教えているのでしょう。派手さはないけれど堅実な人達だと実感しました。また自然と太陽に対する愛着は、日光浴風景につよく表れています。公園、カフェテリア、どこでも太陽に肌をさらし続ける人を見かけました。私たちの訪れた6月は夏、一年で一番良い季節なのです。帽子をかぶっているのは子供と観光客ぐらいでしょう。

福祉視察

一般住宅に暮らす88歳のMさんは、真っ赤なスーツと靴でした。ベランダで育てたパンジーの花を1本ずつ私どもの胸につけて歓迎してくれました。電話式になったペンダントで在宅ケアステーションとの会話を実演してくれたり、軽い麻痺のある足のリハビリを見せてくれました。改造したキッチン、風呂など3DKはある部屋を案内して、ワインも飲ませてくれました。ヘルパーさんはただ彼女を優しく見守っていました。

コミュニン（日本の市町村にあたる自治体組織）運営のサービスハウスに住む97歳のEさん。訪問時、力強くピアノを弾いて下さり、アンコールに応じて、かぶっていた帽子を隣の部屋のベッドまで円盤のように投げ、再び演奏する彼女はとても97歳には見えません。心の若さでしょうか。

介護を多く必要とする身体障害者や知的障害者、痴呆、アルコール中毒者用の住宅であるグループホームも一般住宅と変わらず、ゆったりした部屋には美しいカーテンと壁に家族の写真と、恵まれた環境でした。アルコール中毒の68歳の男性Jさんはもう回復期に入っていました。

いずれの方も、訪問時の手作り人形やグリーティングカードなどのお土産に笑顔を見せて下さり、また私の折った鶴や亀などの折り紙も珍しがっていただきました。一人住まいでも何の心配もなく生活できる皆さんに心がなごみました。参加者のうち4名だけが幸運にも夜間パトロールに随伴できました。私はジェスターさんとアネットさんの車でEさんという88歳の女性のお宅を訪問しました。夜間パトロールは2人ペアで、必要に応じて随時訪問します。Eさんは主にベッド上の生活ですが、ジェスターさんが手際よくパジャマや下履きの交換をごく自然にする様子は、まるで孫のようで感心しました。変な羞恥心が両者にはなく、席を外そうとする私を止めて下さり、戸惑いました。その後私の折った鶴を天井からつるしてくれたり、読みたい本を戸棚から運ぶなど、Eさんの気持ちを推察しての彼のケアは見事でした。あと2件の訪問は夕食の準備と服薬の介助でした。

* 視察旅行を終えて *

スウェーデンの女性管理職の存在（40%）と女性の就労率の高さ（85%）、そして選挙の投票率の高さ（90%以上）について本で読んではいましたが、今回の訪問でそれが理解できました。国民の意見を政治に反映し実行できるということ。その想いが30年前は貧しく老人虐待のあった国を、見事な福祉国家に変えたのだと感服しました。福祉に関心を持つまでは、スウェーデンについて、バイキング、スウェーデン刺繍、ノーベル賞授受地というような単純なイメージしか持たず、深く反省しました。“180年間も戦争をしていない工業国はスウェーデンだけ”（岡沢氏）と汚されていない歴史を持つスウェーデン人に羨望の念を禁じ得ません。

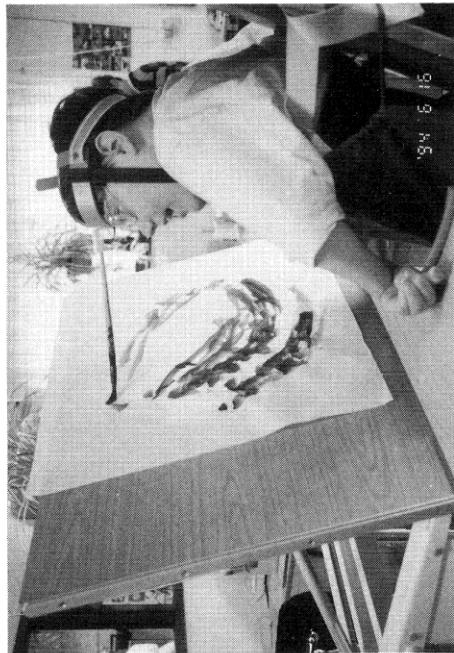
旅行中通訳して下さった馬場浩さん、訓覇法子さん、藤井恵美さんには大変感謝しています。彼ら3人が3人ともスウェーデンに永住したいとのことでした。日本にはない魅力がこの国にはあるのでしょうか。

多くを学んだ満足感で疲れは全然ありませんでした。私が微動だにせず就眠することを同室者から聞かされ、今まで気づかなかった自分を発見するというおまけもありました。救護班にとリーダーに誘われて参加した視察にしてはできすぎでした。駆け足で回った今回の旅行でしたが、参加できたことにととても感謝しています。一人でも安心して生活できる社会を行政と地域住民が力を合わせ作り上げていく必要性を強く感じた旅でした。

（名古屋大学医療技術短期大学部助教授・看護学科）



夜間パトロール(在宅訪問)
Eさん88歳「まるで家族のよう!」。男性ヘルパーさんが
折り紙を天井から吊るしてくれました。



「手足がきかなくても画は描けるんだ」知的、身体的
障害者の作品は生協で販売されます。A君、19歳。



97歳のEさん(女性)は在宅訪問時にピアノを弾いて
くれました。



在宅訪問時、Jさんは折り紙の飛ぶ鶴を大変喜んで
くれました。